

氏 名	岩田 明子
学 位 の 種 類	博士（美術）
学 位 記 番 号	博美第 18 号
学位授与年月日	平成 3 0 年 3 月 2 3 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
題 目	学位論文題目 絹本著色「大仏頂曼荼羅図」想定復元模写による表現技法の研究
	研究作品題目 奈良国立博物館蔵 絹本著色「大仏頂曼荼羅図」想定復元模写 （素材：絹・日本画絵具・金箔・銀箔、技法：絹本着色・截金、127.0 ×88.5cm）
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 岡田 眞治 副 査 教 授 北田 克己 副 査 准教授 岩永 てるみ 外 部 奈良国立博物館学芸部 審査委員 教育室長 谷口 耕生

1 学位論文の要旨

本研究は、博士前期課程で行った奈良国立博物館所蔵絹本著色「大仏頂曼荼羅図」（以下、奈良博本とする）の現状模写研究をもとに、光学調査、先行研究論文、類似作例、文献資料とを合わせて想定復元模写を行い、描き手として研究過程や完成作品から図像表現の意図を探ることにより、本作品を描いた作者が目指した仏画の在り様、そしてそこから平安時代後期仏画に込められた当時の美的感覚についての一考を示すことを目的としている。

奈良博本は平安時代後期に描かれた曼荼羅図である。多く残されている曼荼羅作品の中で自然景の広い空間に尊像を配置する風景型曼荼羅図は数が少ない。

密教儀式である大仏頂法を行う際に本尊として掲げられるこの図様は、儀式に用いる図像を集めた白描図集に記録として残っているものの、現存作例は奈良博本とボストン美術館所蔵のものとの 2 点のみである。さらに本来伝承されている白描図に忠実に描く密教絵画とは異なる特徴があり、奈良博本の表現は、当時の世相・美的感覚によって変更されたものである可能性が示唆されているが解明されていないことが多い。

博士前期課程の修了研究で行った現状模写による技法研究の結果、奈良博本の特徴である金属画材の使い分けは、画面作りのために制作者が意図的に行ったものであるように感じられた。しかし、銀截金のような金属画材を用いた部分は変色して制作当初の輝きを失い、さらにその下地となる絵具も退色しているため、制作当初の色彩は現状の目視のみでは想像し難い。さらに大仏頂曼荼羅図の彩色作例と先行研究は少なく、図様の解釈や同図様の彩色表現と比較研究を行うことも困難であった。

そこで博士後期課程の 3 年間では、所蔵博物館の蛍光 X 線調査・赤外線撮影による作品そのものから読み取ることができる情報をもとに同時代作例や彩色表現に類似性のある作例、及びそれらの先行研究資料を参考にし、制作当初の色彩の想定復元を行った。

本論第 1 章には研究目的と先行研究、研究方法について述べている。第 2 章では奈良博

本の図様やその特異性について、制作期の時代背景や白描図集、図様表現に着目した類似作例の考察について述べている。そして第3章では、奈良国立博物館による奈良博本の光学調査結果についてと類似作例の近赤外線写真との比較考察について記述している。第4章では、第2章の美術史的資料の考察と第3章の光学調査資料による考察をもとに部分想定復元案を制作し、視覚的な考察についてまとめている。第5章では最終的な想定復元案をもとにした原寸大想定復元模写の制作過程と完成後の所見、そして本研究の結論を記述している。

奈良博本の特異性についての本研究での結論は、白描図集における大仏頂曼荼羅図との相違、奈良博本に使用されている金属画材と思想、美術史的位置と制作者という三つの点に分けて述べている。

一つ目の白描図集における大仏頂曼荼羅図との相違について、先行研究にていくつかの白描図集に描かれている大仏頂曼荼羅図のうち、醍醐寺系統の図様解釈が奈良博本には反映されているという指摘を参考にしたが、白描図集との大きな相違点として二龍の頭部の数があつた。この点については、二龍の類似作例から図様は異なるものの奈良博本と同じく醍醐寺系統の解釈を反映させたものである可能性が考えられる。しかし、構図に関しては大日金輪と釈迦金輪の対称的な解釈を反映した同寸の円で表現しているが、七宝を主尊周りに均等に並べるのではなく象宝と唐花を左右同じ位置に並べていることから、二尊以外の配置に関しては各図様の持つ儀軌的区別は無いものとする。よって奈良博本は醍醐寺系統の解釈をもとにしつつも、本来の仏画のような図像伝播の忠実性よりも整然とした構図の美しさに重点を置いて制作されたものであると言える。

二つ目の奈良博本に使用されている金属画材と思想について、金銀截金が二尊で対称的に使い分けられているのは、当時流行した銀に対する思想や解釈によるものであるのかは本研究でははっきりと読み取ることは難しかった。筆者の技法的な所見としては、金截金よりも銀截金の方が箔に厚みがあり、筆を使って曲線状に変形させることが困難であると感じた。しかし、銀泥ではなくあえて扱いの難しい銀截金を使用していることは技法的にも二尊の対称的な表現にこだわったものであると思われる。また、唐花や龍王の雲気にも銀泥を塗り、図様の儀軌的解釈の重要性に関係なく画面全体に使用されているため、各図様の銀泥の使用は構図と同じく視覚的な統一感を狙ったものであると考える。このことから銀の使用そのものが当時の思想の反映である可能性はあるが、奈良博本においては視覚的効果を得るためという意図を多分に含んでいると考えられる。

三つ目の美術史的位置と制作者については、類似作例の先行研究や大仏頂曼荼羅図の図像解釈から依頼者は醍醐寺にゆかりのあるものだと想定されるが、絵の制作者について類似作例との関連性から想像すれば、奈良博本の図様表現は平安時代後期から鎌倉時代初期にかけてのある一定の表現形態の流れを汲んでいると考えられる。これらの表現が多様な尊像において共通していることから、初期作品をもとにその表現をまねて様々な彩色画が派生した可能性や、同工房のような近接的な環境の中でそれらの作品が制作されたものなのではないかという想像も難くない。

仏画の隆盛期である平安後期仏画は依頼者や制作者の意向が直接的に反映されている。その中でも奈良博本は、その個性的な形態と装飾性から依頼者それぞれに理想とする仏の姿を視覚化することに心血を注ぎ、様々な仏画が生まれる背景となった当時の人々の篤い

信仰心を窺い知ることができる作品である。

2 学位論文審査の要旨

岩田明子氏は博士前期課程で行った奈良国立博物館所蔵絹本着色「大仏頂曼荼羅図」(以下、奈良博本とする)の現状模写研究をもとに、光学調査、先行研究論文、類似作例、文献資料とを合わせて想定復元模写を行い、描き手として研究過程や完成作品から図像表現の意図を探ることにより、本作品を描いた作者が目指した仏画の在り様、そしてそこから平安時代後期仏画に込められた当時の美的感学についての一考を示す論文となっている。

この作品は平安時代後期に描かれた曼荼羅図であるが、自然景の広い空間に同じ大きさの尊像を二体上下に配置する風景型曼荼羅に分類される作品で、現在残っているものはボストン美術館所蔵の2点のみとなっている貴重な作品である。よって奈良博本の彩色作例と先行研究は少なく、同様の解釈や同図様の彩色表現と比較研究を行うことは困難であった。そこで後期博士課程の3年間で光学調査のデータをもとに、同時代作例や彩色表現に類似性のある作例、及びそれらの先行研究資料を参考に、制作当初の色彩の想定復元を行った。特に画面の印象を左右する、金属画材の効果を検証することにより制作者の意図をくみ取ることができると推察している。特に従来の曼荼羅と異なる二尊で対称的に使い分ける特異な金銀截金表現に注目しており、平安後期仏画の特徴となっている中間色を用いた優美な表現とは言えず、明快な色彩を特徴とする南都仏画に近い色彩表現と分析している。また、時代背景的な側面にも注目しており、荘厳な国家祈禱的な宗教儀式に用いられるというよりも貴族個人の意向、好みを強く反映しているとも分析している。

奈良博本の線描表現についても着目しており、二尊の描き方と周囲の風景の描き方が異なっていることにも言及し、絵仏師以外の人物の手によるもので背景風景画の描写の達筆さは、風景画としての空間を重視して描かれていると指摘している。

氏は復元にあたり同時代の類似作品について研究しているが、取捨選択が必要と考えた。顔の表現は奈良博所蔵の「千手観音像」など同時代の多くの作例から見事な推察で類似性を発見している。特に感心したのは海の部分で顔料や青色の濃淡などを決めるのに光学調査のみを頼らず、表現者としての考察を持って色を検討し、決めていることで視覚的な美しさを優先している点である。試作を重ね実際に復元模写をする側に立つことで出てくるものがあり、より深い理解度を得ることができた。

以上の様に描き手としての論考は、今までの新しい知見を示すことをこの論文では言及しており、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

岩田明子氏は博士前期課程で行った現状模写への取り組みを根底に、博士後期課程では想定復元模写をするという研究課題は明確であり、実際に描くことにより、新しい知見を導き出したことを大いに評価したい。

制作にあたり詳細な現状観察に基づき、各種光学調査も加味しながら絵画表現の妥当性を重視することにより極めて高い完成度を成し得たと考えられる。粘り強く同時代の作品の比較研究を深め、試作品を作り復元案を決めていることも付け加える。特に銀截金は技術的に非常に難しく流麗な曲線を作り出すことは困難を極めたと思われるが、金截金同様

に美しい曲線を作っていた。

大仏頂曼荼羅という平安仏画の復元模写研究を実際に描く側の立場で考察し、新たにみえてきた着眼点を示すことができたことは博士の学位を与えるに十分である。